

通説で
歩く
ALPINE ALPS
STV

We'll Never Walk Alone

堤の原風景

21st century is a "century of water"

霞
堤

龍
王
御

木
工

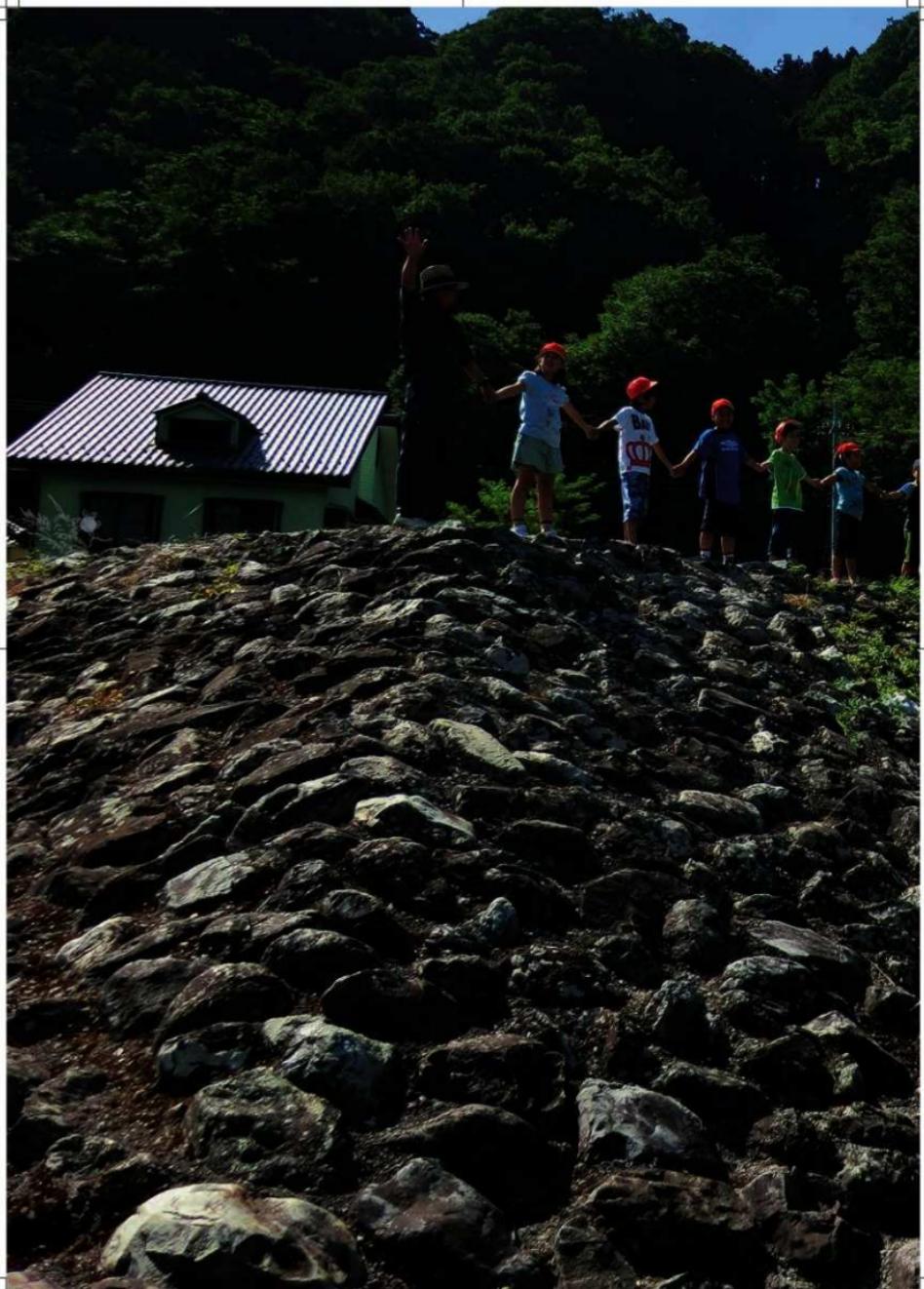
沈
川
築

河
原
風
景

堤の原風景

堤の原風景

堤の原風景



記憶をつなぐ
人がつながる
この時代を忘れない



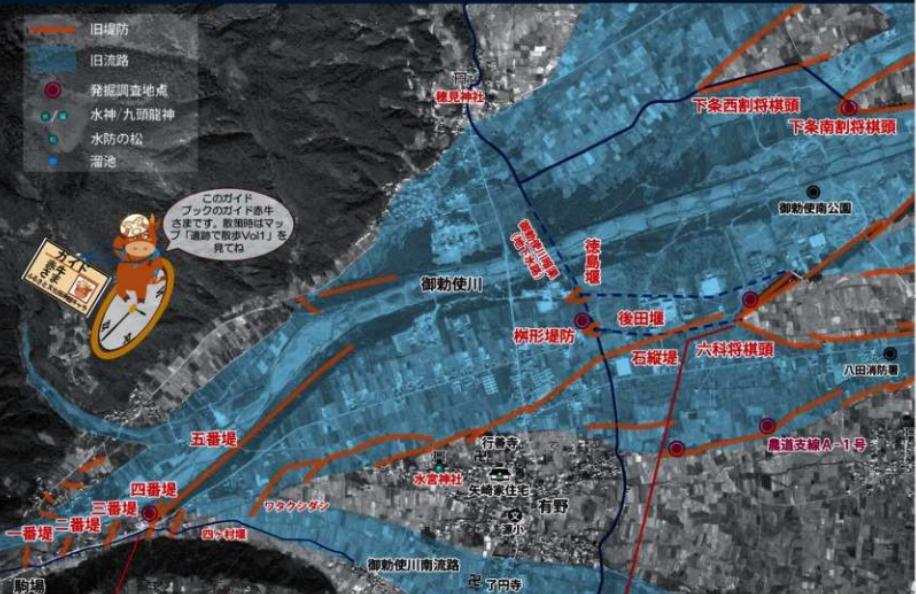
国指定史跡石積出三番堤

御勅使川の治水

信玄伝承の治水事業

戦国時代、御勤使川は信玄公から安堵へ向かう県道甲斐若狭坂を経て、安線上に流れています。その川を地元で「前御勤使川」と呼びます。前御勤使川は古くから墨れ川として有名で、大雨があると洪水を起こし、釜無川を押し出します。甲府盆地中央部に大きな水害をもたらしました。武田信玄はこの前御勤使川を釜無川の治水事業に着手したと言われます。(江)戸時代後にまとめられた地図『甲斐国志』(1814年)には、信玄が前御勤使

使用の流れを北に付け替え、高岩と呼ばれる崖の手前で釜無川と合流させた次のよう治水工事が記述されています。それは、駒場、有野に石積出を置いて流れを高岩のある東北へ向け、八代に特急頭を置いて水勢を二つに分け、下条南側の岩(鬼城跡)を砸き切って河道を作り、釜無川との合流地点に十六石を置いて御使軌道の流れを弱め。高岩の手前で釜無川と合流させ、さらに竜王に信玄塚(龍王川跡)を築いて中郡を守るというものです。



石積出 Isitumidasj

御動御川の本流を高岩の
方向（北東）へ向けます
（『甲斐国志』）。



六科將棋頭 Muzinasyougigasira

流れをふたつに分派
し水勢を弱めます
（「甲斐国志」）

木曽川本流

ダム

河床

田んぼ

六ヶ集落

前駒頭使用川

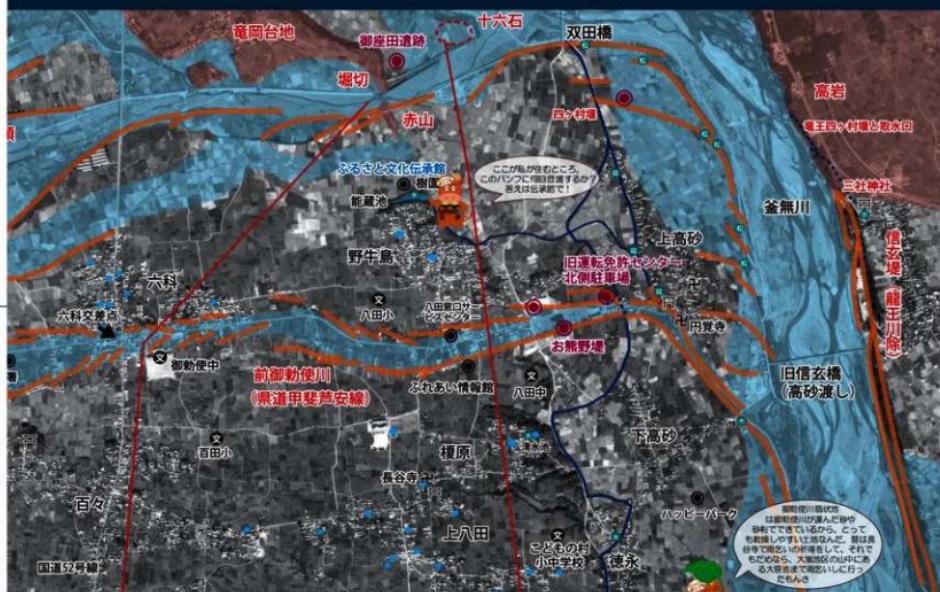
信玄堤 Singenzutumi

信玄の時代に築堤された堤防。その資料として永禄3年（1560）棟別役（税）を免除するかわりに、堤防を管理する村（竜王）へ移住者を募集する武田家の文書が残されている。甲府盆地中央方面へ向かう釜無川の流路をふさぎ、下流の村々を守る役割を持っていた。



信玄堤絵図 文政 11年 (1828) (山梨県立博物館蔵)

貞享5年(1688)に描かれた絵図の写し。高岩、本土手と石積出、33ヶ所の付出し、下河除、一の出し、二の出しなどが描かれており、現在の堤防と形状が異なっていることがわかる。



堀切 Horikiri

並崎から続く竜岡台地を信玄が切り通したと伝えられる人工の水路（甲斐国志）。最近では御動使川が自然と掘り抜いてできたという説もある。並崎市御座田遺跡の発掘調査結果から、すでに13～14世紀には、堀切が存在していた可能性が高まっている。



並崎市御座田遺跡の発掘調査結果から、すでに13～14世紀には、堀切が存在していた可能性が高まっている。

十六石 Zyurokuisi

釜無川の流れを高岩に向け、上高砂集落を守っている。古絵図にはまとまって石が置かれていた状況が描かれている。また、下今井村と下条南割村の境界標識の役割も果たしていたとの指摘もある。



古絵図（部分）



川筋 釜無川の源流・・・釜に見立てられるような深い淵がみられないことが由来と伝えられています。



御勅使川の治水

信玄伝承の堤防遺跡

石積出四番堤 Isitumidasiyonbantei

駒場浄水場の排泥池や濃縮槽の建設に伴い、石積出四番堤の一部が発見されたため、緊急調査を実施しました。調査によって石積出にはさまざまな技術が用いられていることがわかりました。



様子土台

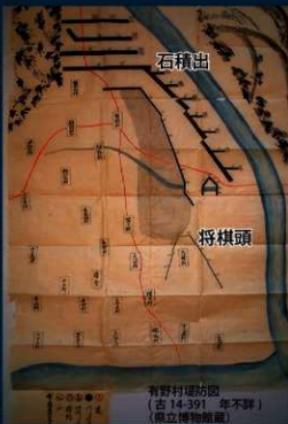
堤防本体



木工沈床

鉄製のボルト

竪籠(鉄線蛇籠)



有野村堤防図
(古14-391 年不詳)
(県立博物館蔵)



調査風景

堤防の基底部は丸太を梯子状に組むことで、石積が不均等に沈まないようにする技術（梯子土台）が用いられています。堤防本体には80cm前後の大きな石が積み上げられ、隙間にはコンクリートが充填されしっかりと固定されています。川表側には木枠を組み、その中に石を詰めて、堤防の根元が水流に洗い流されるのを防ぐ根固めの施設（木工沈床）が造られていました。さらに川表側を掘り進めると、鐵線で編んだ籠の中に川原石を詰めた竪籠を縦に並べた竪籠が発見されました。このように幾重もの技術が石積出に使われているのを見ると、いかに上流での御勅使川の力が激しかったかが、想像できます。

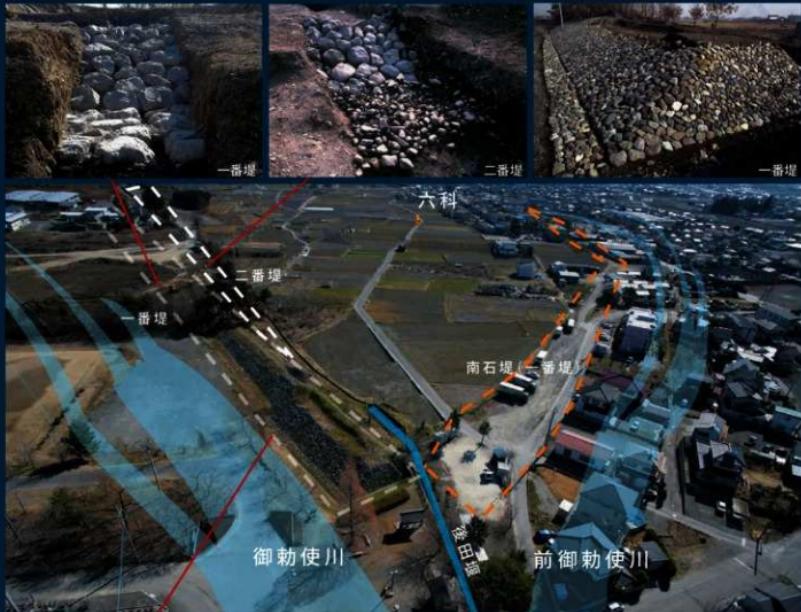
コンクリートや木工沈床、鐵線竪籠は明治時代以降の技術であり、発掘された石積出は、明治以降、大正期の姿と考えられます。信玄が石積出を築いた証拠は文書史料、発掘調査によっても確認されていません。しかし堤防は、流されでは繰り返し修復されるものなので、その実像は今後の調査研究によって変わるものかもしれません。

江戸時代の有野村は、承応3年（1654）幕府發給の文書によって、堤防を修築する際には、下流の21ヶ村へ工事のため働くよう指団できる権利を持っていました。それは石積出が有野の集落や水田だけでなく御勅使川扇状地全体の村々を守る役割を果たしていたからです。上図の有野村堤防図には、石積出によって下流の村々が守られている様子が描かれています。

六科将棋頭 Muzinasyougigasira

将棋頭は、その名のとおり将棋の駒に見立てられた石積みの堤防で、国の史跡に指定されています。武田信玄が築堤し、御勅使川の流れを分流したと伝えられていますが、いつ頃造られたのかはまだわかっていません。将棋頭本来の役割は、徳島報から将棋頭の堤内に導水して作られた旧六科村の水田とその下流の村々を守ることにあり、遅くとも徳島堰が完成した17世紀後半には耕地を守る堤防が築かれていたと考えられます。

平成19年度に実施した試掘確認調査によって、現在史跡に指定されている堤防が「一番」「二番」と呼ばれる2本の堤防に分かれ、2重の堤防で先端部が守られていることが明らかになりました。一番堤の石積みの土台には不均等に石が沈まないよう梯子土台が用いられ、さらにその木枠をもう一列延ばして木枠の間に人頭大の石を詰め、根固めとしていることも新たにわかりました。一方、先端南側の一番堤は削平されていますが、基礎の一部は地下に残されており、現在の土地や草を見ても一番堤の範囲がわかるようになっています。



← 石積みの土台
← 根固め
1列は石積みを支える土台として、1列は根固めに応用して利用されています。

梯子土台のイメージ

川歴 御勅使川の源流。。。天長年間に3回大洪水を引き起こし、3回とも天皇の勅使が下向したという伝承から「御勅使」あるいは「三勅使」と言われたことが由来と伝えられています。



将棋頭に守られた六科の水田風景

御勅使川の治水

徳島堰と樹形堤防



昭和 30 年有野地内の徳島堰

コンクリート化される前の石積みの姿が見られる。



近くの人は昔ここで泳ぎを覚えたんだって。魚や沢カニもたくさんいたそうだよ。

徳島堰絵図 慶応 4 年 (1868) 部分 (山梨県立博物館蔵)
御勅使川を盾果で横断する徳島堰と取水口を守る樹形堤防が描かれています。徳島堰からの取水口は野牛島に 1 力所、六科に 2 力所あり、それぞれの村の取水口を樹形堤防が保護していました。現在は南端の六科村の堤防だけが残されています。

徳島堰 Tokusimasegi

徳島堰は並崎市上門井で釜無川から取水し、南アルプス市曲輪田新田まで約 17km を結ぶ灌漑用水路です。江戸時代の寛文 5 年 (1665) 江戸深川の徳島兵左衛門によって開削が始められました。2 年後には曲輪田まで通水に成功しますが、大雨によって 2 度堰が押没すると兵左衛門は事業から手を引き、その後中府藩が引き継ぎます。甲府城代から堰の復旧工事を命ぜられた有野村の矢崎又右衛門は、私財を投じて工事に取り組み、寛文 10 年に工事を完成させ、翌 11 年にこの水路は「徳島堰」と命名されました。堰の開削によって耕地が広かり、曲輪田新田や飯野新田、六科新田など新たな村々が開かれるなど、水不足に悩む地域に多人な恩恵をもたらしました。

現在徳島堰の水は、水田だけでなくスプリンクラーに導き水され、市内の橋やさくらんぼを育み、フルーツ王国南アルプス市を支えています。

御勅使川暗渠の移り変わり

徳島堰の工事にとって最大の難所は、川幅の広い御勅使川でした。完成当初は溝を掘り、板を並べてせき止める「板閘」と呼ばれる開閘で通水しましたが、少なくとも 18 世紀初頭には木製の埋堤 (暗渠) に変わります。幕末頃には暗渠の壁が石積みとなり、明治から大正時代に入ると粗石をアーチ状に積む「眼鏡」と呼ばれる工法に変わります。昭和 40 年代には、釜無右岸土地改良事業によってアーチ式の石積の内側からコンクリートが「巻立て」られ、現在の姿になりました。

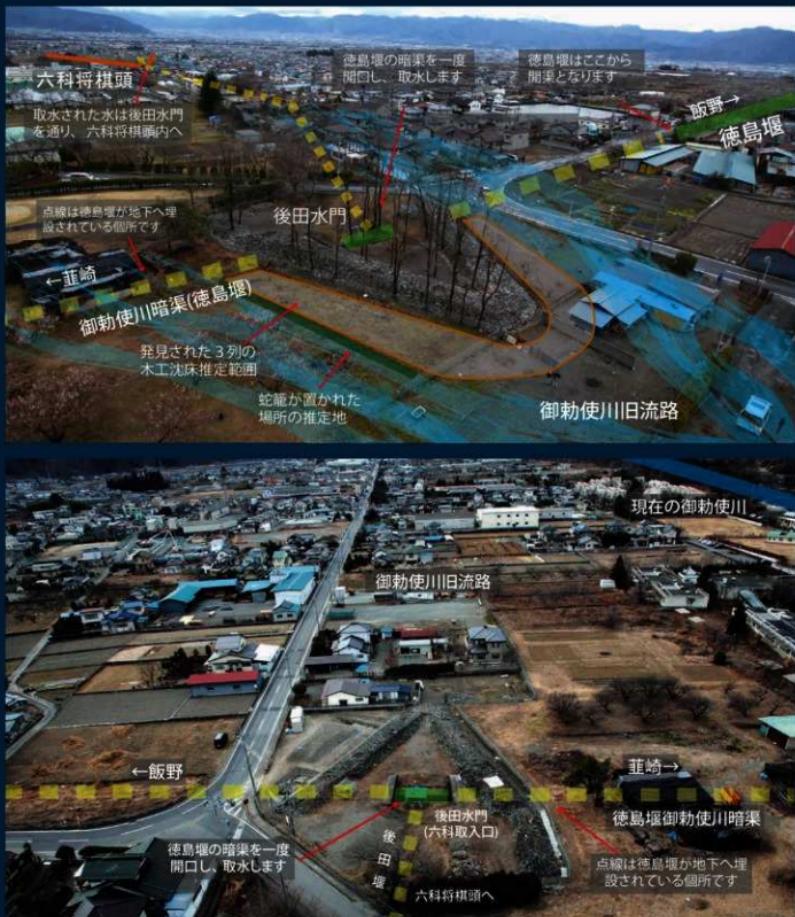


桟形堤防 Masugata teibou

六科村や野牛島村は、川幅が広い御勅使川の下流に位置しているため、徳島堰の水を利用するには御勅使川の川原の中で暗渠となっている徳島堰を一度開口して取水しなければなりませんでした。その取水口を守る将棋の駒の形をした堤防が桟形堤防です。取水された水は後田水門を通して六科将棋頭の中に導水され、水田に利用されました。

平成 21・23・24 年度に行なった範囲確認調査では、堤防

は砂礫を積み上げた上に川表から川裏まで全体に石積みを施し、相間に「木工沈床」を使用していることがわかりました。木工沈床は 3 段積まれたものが 3 列並べられ、北堤にはさらにその外側に蛇籠を設置して、強い水流に備えた造りとなっていました。桟形堤防は取水口を守るだけでなく、御勅使川を治める重要な施設だったかもしれません。



御動使川の治水

徳島堰と樹形堤防



第2次調査第1トレンチ



第2次調査第2トレンチ

川除
コラム

見直される木工沈床

木工沈床は木材を井桁状に組み、その枠内に川原石を詰め、それを3~5段に積み重ねたものです。樹形堤防や石積出では堤防の根元が流されるのを防ぐため、根固工に用いられていました。明治初期にオランダ人技術者によって伝えられた粗藪沈床を日本人技術者の小西龍之介氏が改良した工法で、明治20年代後半以降主に、急流河川で利用されました。その後コンクリートの護岸が主流となりましたが、近年では川原石を使うことでできる隙間が、稚魚などの生育場

所となるため、自然にやさしい工法として再び注目されています。

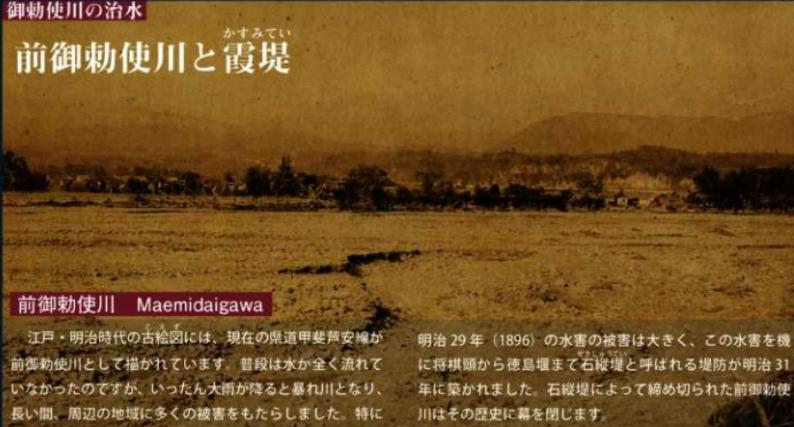




御勅使川の治水

かすみてい

前御勅使川と霞堤



前御勅使川 Maemidaigawa

江戸・明治時代の古絵図には、現在の県道甲斐芦安線が前御勅使川として描かれています。普段は水が全く流れていなかつたのですが、いったん大雨が降ると暴れ川となり、長い間、周辺の地域に多くの被害をもたらしました。特に

明治 29 年（1896）の水害の被害は大きく、この水害を機に将棋頭から徳島まで石壁堤と呼ばれる堤防が明治 31 年に築かれました。石壁堤によって締め切られた前御勅使川はその歴史に幕を閉じます。



上：明治 29 年大水害後の前御勅使川
(菅原美のる氏蔵)、下：同写真拡大
右端の林は現在の上高砂氏神の神明神
社。その左は上高砂集落。中央やや左側
には前御勅使川左岸を守る堤防と並んで
いる牛類が見られ、復旧作業中の人々の
姿も映されている。

左：明治 29 年水害状況図
(南アルプス市蔵)
黒い線が堤防、灰色が堤防の流失箇所、
黄色に塗られた部分が洪水流跡、朱色
が被害にあった家屋を示している。

前御勅使川今昔写真館



昭和24年野牛島停留所



昭和12年野牛島停留所前



平成14年野牛島停留所前



昭和34年六科交差点



平成18年六科交差点

霞堤 Kasumitei

前御勅使川沿いには多くの霞堤が築かれました。急流河川のため、川表側は石積みで覆われています。江戸時代の絵図を見ると、堤防には字ごとに番号が付けられ、字へ番堤と呼ばれていたようです。そのほか特別な名前で呼ばれる堤防もありました。旧運転免許センター南側に現在も残る「お熊野堤」は、徳永地区の氏神熊野神社がその名の語源となっています。

発掘された前御勅使川堤防跡群

開発事業に伴い、これまで5カ所で前御勅使川の旧堤防が発見されました。

一カ所は旧運転免許センター北側駐車場で発見された、前御勅使川左岸を守る堤防です。砂礫を積み上げ川表側に石積みが施されています。一方百々に位置する農道支線A-1号調査地点の前御勅使川右岸堤防は、砂礫を積み上げた構造で、現状では川表側に石積みは見られませんでした。川裏側では古い堤防とともにそれを護岸する蛇籠が発見されています。



上：現在も残る霞堤（野牛島）
下：お熊野堤（P12・13）と調査地点



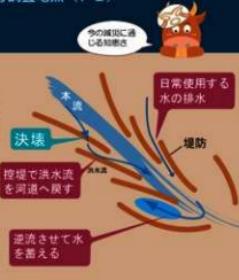
上：旧運転免許センター北側駐車場調査地点（P 3）
下：農道支線 A - 1号調査地点（P 2）

川除 コロム

霞堤のしくみ

霞堤は不連続な堤防でおもに急流河川で造られました。絵図や文書から少なくとも江戸時代にはあったことはわかりますが、「霞堤」の用語自体は明治時代から使われ始めます。

霞堤は上流の堤防が決壊した場合、その洪水流を下流の控堤が防ぎ、再び河道へ戻す役割とともに途切れた部分から日常用水を排水する役割を持っていました。また、堀切付近の霞堤は堤防がとぎれた部分から水を逆流させ、一時に水を蓄える機能も果たしていました。近年では洪水時、魚など水辺の生き物の避難場所にもなっていた点も指摘されています。



御勅使川の治水

前御勅使川とお熊野堤



発掘調査 タイムトラベル



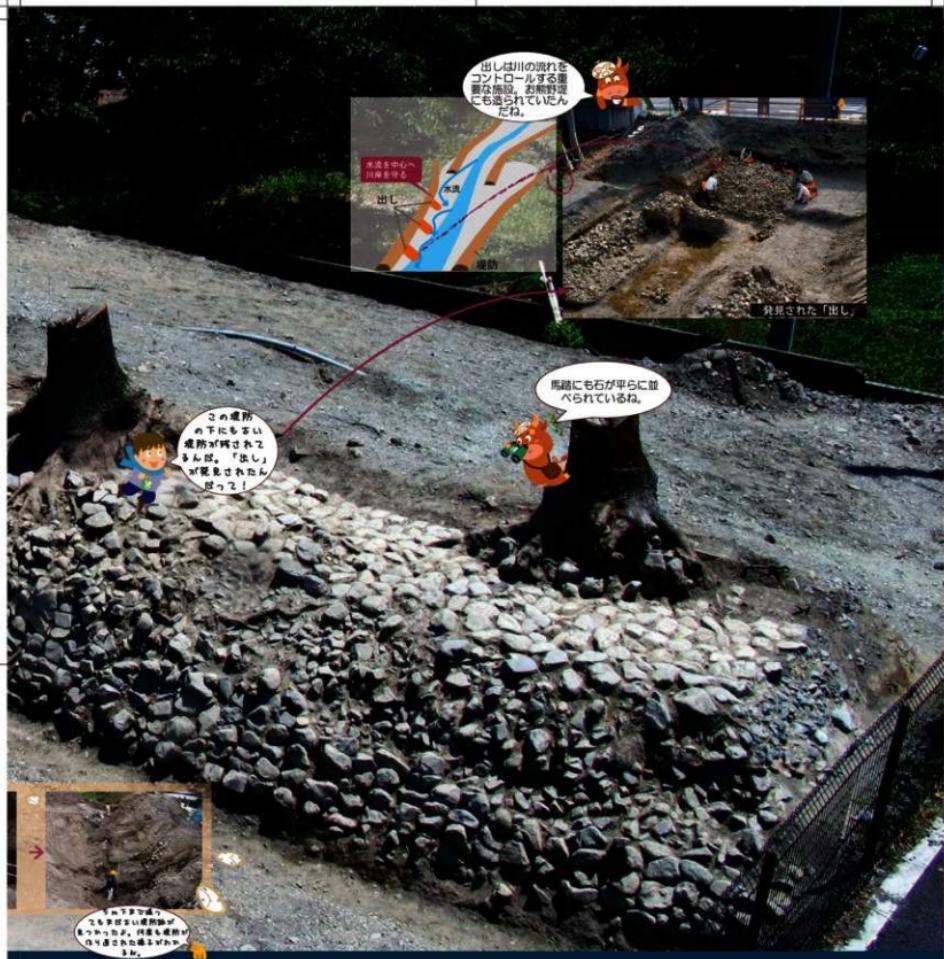
お熊野堤 Okumandoi

野牛島にある旧運転免許センター南側の土手は、明治31年まで流れていた前御勅使川の右岸を守る堤防跡です。古くは「お熊野堤」と呼ばれていました。平成24年度の調査は、お熊野堤の保護を第一の目的とし、市道路建設のため必要最低限の削削がなされる範囲を発掘しました。

調査の結果、西側の地区では、砂や砂利でできた堤防の水流の当たる川表側（水流の当たる側）にのみ石積みが発見されました（上写真）。石積みは石を土上に積み上げながら造られたようで、縦方向に石が並んで見えます。この積み方は石同

士かみ合っていなため崩れやすく、これまで発掘調査が行われた堤防遺跡では全く発見されていない、とても特殊な工法です。さらに調査を進めるごとにこの石積みの堤防の内部からより古い堤防が発見されました。その仕組みは次のとおりです（次回図）。河川は堤防によって河道が固定されると、その河道内に砂や石が運ばれてきて川底が高くなり、次第に洪水の危険性が高くなっていきます。そこで堤防のかさ上げが行われるのですが、さらに砂や石が堆積して川底が上がると、また堤防のかさ上げが必要となります。これが繰り返されると、周辺の地形より川底が高くなるいわゆる天井川ができることがあります。

発掘調査の結果、お熊野堤は少なくとも4回以上かさ上



げされ、前駆動使川が天井川となっている様子がわかりました。また最下層から「出し」と呼ばれる堤防から川の中心へ向かって突き出たものが発見されました（上図）。「出し」は水流をコントロールし、川岸が削られるのを防ぐ役割を果たす、日本の伝統的な治水技術の一つです。信玄堤にも33の出しが設けられていたと言われています。発見された各堤防の時代は、残念ながら時期を決定する遺物が出土していないため特定することはできませんが、下層で発見された堤防は江戸時代まで遡る可能性があります。

お熊野堤は、今までこそその役割を終えていますが、発掘されてくる過去の姿を目の当たりにすると、先人たちの治水へ

の頼りが感じられます。今後のまちづくり、そして防災への備えをどうするべきか。私たちのすぐ足元に、そのみちしるべが残されているのです。



釜無川の治水

治水システムの要将監堤

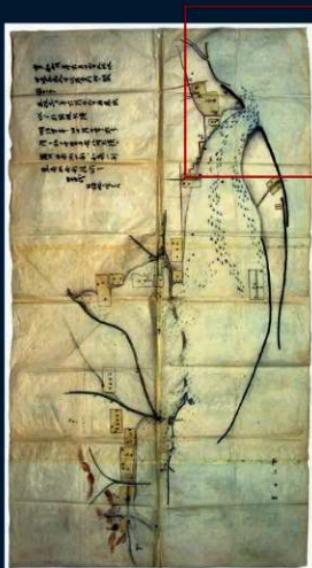
将監堤は、現在の南アルプス市鏡中条につくられた釜無川の堤防です。

将監堤がつくられた鏡中条の長遠寺には享和2年（1802）に将監堤が決壊した際の状況を描いた「水害図」が残されていました。

この絵図を見れば、将監堤が決壊した場合、堤防のある鏡

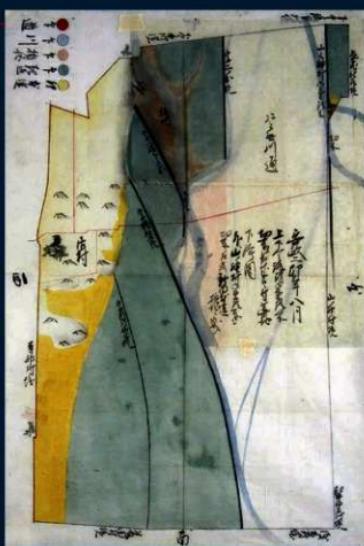
などと呼ばれ、文政11年（1828）の台風（いわゆるシーボルト台風）によって、壊滅的な被害をうけた将監堤を中心とする治水システムを再構築（模様替）する為了に、文政12年（1829）に新たに構築された堤防です。

この「もようげん堤」は構築時の出来形船（工事の竣工報告書「南アルプス市蔵」）が残っていて、構築当初の規模や構造、形状が判明しているうえ、造られた年代がはっきりしている堤防遺跡です。八幡下堤は、将監堤とともに昔の人々の知恵を知ることができる貴重な堤防遺跡ということができます。



安政2年水害
古絵図範囲

「水害図」
享和2年
1802
(長遠寺蔵)



古絵図範囲
安政2年
1802
の水害の状況を示す絵図
(南アルプス市蔵)

中条村のみならず、はるか下流の熊沢町まで、岐西北域の南半地域全域が被害をうけます。

地域に残る古文書には、将監堤は、必ずといってよいほど、「将監堤ノ儀下十三カ村、一万石ノ御開堤ニテ」との定冠詞を伴って登場し、現在の南アルプス市域の南半分を含む水下13カ村、石高1万石を守ってきた、まさに釜無川右岸の治水システムの要の堤防であったという事ができます。

鏡中条村に残る絵図を見れば、将監堤は単独で機能したのではなく、「土出し堤」、「八幡下堤」、「内将監堤」などの堤防とセットで、いわばひとつの治水システムとして機能していたことがわかります。

この中で「八幡下堤」は、「模様替堤」、「もようげん堤」



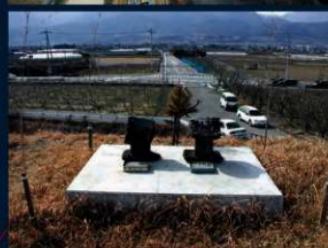
明治40年（1907）の水害を撮影したといわれる写真
将監堤が決壊し、洪水流により押し倒された砂礫により、水田地帯が一面埋め尽くされてしまっている。



釜飯川 Kamanasigawa



大正 10 年頃の仮橋と高砂渡し（齋藤毅一氏蔵）

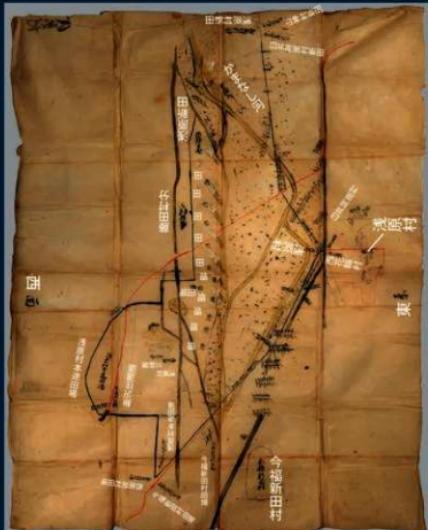


避水台

1970 年攝影

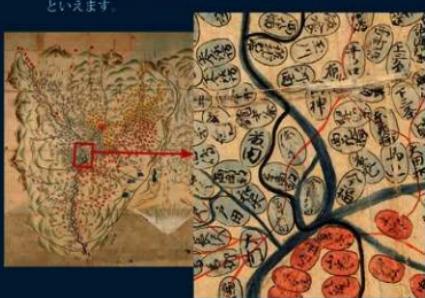
釜無川の治水

移転する村と川



『浅原村絵図』(年不詳 南アルプス市蔵)

釜無川の川中に浅原村の領域が描かれ、浅原村の人たちの戸敷地が釜無川の対岸、西花輪村の中に描かれています。浅原村が釜無川の対岸にあることからこの絵図が描かれた年代は寛政3年以前といえます。



『甲斐国絵図』(年不詳 山梨県立博物館蔵)

二股に分かれた釜無川のうち、現在と違い今福と今福新田の間にあった河曲が太く描かれ、本流だったことがわかります。今福新田と東南側の間に描かれる現在の流れは細く、「當時本流ではなかったのです。」絵図は年不詳ですが、今福と今福新田の間に本流があることから、少なくとも正徳5年以前の状況を描いているといえます。

市の西端にあり、釜無川に沿って集落が広がる浅原地区。近世浅原村の歴史は、まさに川の流れに翻弄された苦難の歴史でした。

記録によれば、浅原村は水害により天正14年(1586)以降30年余りの間に3回もの移転を繰り返しています。この頃できた竜王の信玄堤と、これに続く堤によって、甲府盆地中央部は安定してきましたが、釜無川の流れが浅原村の方に向かうようになってしまったのです。繰り返される水害に村はついに釜無川の西岸に居場所をなくし、寛永19年(1642)、釜無川対岸、西花輪村地内に4度目の移転が行われました。

その後、長く対岸に「仮住まい」していた浅原村ですが、18世紀に入ると転機が訪れます。この頃また段々と川の流れが変わり、今度は逆に浅原村が仮住まいした釜無川東岸に水害が頻発します。そこで浅原村は寛政3年(1791)、釜無川西岸に戻ることを決め、現在の場所に新たな村をつくり、ようやくその流転の歴史に終止符を打ちました。

しかし、これで村が水害から解放されたわけではなく、15ページに示したとおり、享和2年(1802)には幕府により浅原村の北端に「避水台」が造られ、その後も村の苦難が続いたことを知らせてくれます。



蓮性寺（日蓮宗）

蓮性寺は、元々浅原村の寺院ですが、現在も対岸の中央市西花輪にあり、浅原村流転の歴史を物語っています。

釜無川は、18世紀初頭まで今福新田村（現在の中央市今福新田）の北で東西二股に分かれて流れていましたが、正徳5年(1715)、笛吹川との合流をスムーズにして、笛吹川沿岸の村々の水害を軽減するため、本流を西側の流れに統合する工事が行われ、その後享保15年(1730)に本流路に新田を拓くために旧本流の完全な締切工事が行われ、釜無川は現在のような流路になりました。

これにより、今福と今福新田の間に新たな耕地が出現した一方で、釜無川西岸や下流の村からは、川底が高くなり排水が抜けにくくなったり、川が無理に曲がって新たな水害がおこるようになった、など苦情が寄せられるようになってしまいました。

(※史料によっては享保16年)

ある村を守るために堤が築かれると、それによって川の流れが変り、今まであまり水害を受けることのなかった新たな村が頻繁に水害を受けるようになる。そこでその村々を守るためにさらに新たに堤が造られると、また別の村に被害が移る。このような繰り返しによって少しずつ堤が整備され、現在わたしたちがみる「川の風景」はできあがってきたのです。



牛や牛は甲州治水の特徴なのです

釜無川 Kamimogawa

川除コラム

川の中の牛

御勅使川や釜無川の中にかつてたくさん牛のがいたことを知っていますか。牛といつても「モー」と鳴く牛ではなく、堤防本体を水流から守るために置かれた「牛制」の一つでさまざまな形、大きさがあります。おおむね、材料は丸太を組み合わせ、石を詰め込んだ蛇籠を重しにのせて造られています。牛にもいろいろな種類があって、棚牛や堅牛、大型牛、真牛、黃牛など細かく区別されていました。江戸時代の初め頃は種類が少なく、時代

が経つにつれバリエーションが増えています。川の状況によっても、住む牛は変えられました。牛といえば聖牛が有名ですが、南アルプス市の釜無川にもっとも多く住んでいた牛は実は「棚牛」でした。全牛枠類に占めるその割合はなんと8割以上。棚牛は必ず5匹または7匹セットを組み合わせて用いました。こうした牛や枠の発達が甲州の治水技術の特徴だと言えます。その技術は材質を変えながら明治時代以降も受け継がれています。現在では少なくなりましたが、少し前まで各消防団では生牛で練習が行われていました。

御影組中組消防防護牛



棚牛

玄牛

大型牛

さまざまな牛（地方凡例）

川除コラム

現代に残る伝統的治水の技術

釜無川や御勅使川の治水に腐心してきた上高砂地区には、伝統的な治水技術をもつ方が現在でもお住まいです。竹蛇籠づくりの職人である清水さん、森本さん、齊藤さんの3人です。昭和20年代から30年代の初めまで、農閑期の1~2月になると竹蛇籠作りに従事し、地元の四ヶ村堰取水口用の「牛」として作ることもあれば、遠くは富士川河口付近まで出向き護岸用のものを作ることもありました。県内に大きな被害をもたらした昭和34年の台風7号の時には、風雨の中、韮崎市船山橋付近で竹蛇籠を作り、堤防の決壊を防いだそうです。

同じ上高砂地区的清平九郎さんは堤防の石積みを積む職人さんで、技術は父親から学び、農閑期の間、釜無川や御勅使川の堤防の石積み工事に従事されました。石の噛み合せを見極めながら、一つ一つ手で積んだそうです。

こうした技術は現在でも「環境」や「景観」などのキーワードから新たな価値が見だされつつあります。



竹蛇籠を作る森本さん、清水さん、齊藤さん（左から）



齊藤さん愛用の「玄籠」。
父親である「徳八」さんから受け継いだ。

釜無川の治水

釜無川の堤防遺跡

御動使川との合流地点より下流の釜無川では、石積みの堤防が築かれることがほとんどなく、砂礫を盛土し、粘土で

被覆する堤防が造されました。発掘調査が実施されている元番下堤跡、百間堤、将監堤も砂礫で造られています。江戸時代の享保年間以降、不連続堤防が繰め切られたり新たに連続堤が築かれたことにより釜無川の河床が上がり、堤防の大ささも徐々に高く造られてきます。

壱番下堤跡 Itibansitatutumiato

釜無川右岸を守る上高砂二番堤の川表側が調査されました（P.15）。堤防は砂礫を盛土して造られています。現在の堤防のなかに3段階の古い堤防が発見され、次第に堤防が大きくなっています。造られたのは江戸時代、16世紀中頃と推測されています。



壱番下堤跡

百間堤 Hyakkendou

旧徳永村、下高砂村境にある控えの堤防で、108間ある長さから百間堤と呼ばれています（P.15）。文書によれば天保8年（1837）築堤。堤防は砂礫を盛土して造られています。



百間堤（南から）

将監堤 Syougentei

将監堤は江戸時代以前から現在の南アルプス市域を含む岐西地方の南北全域を守ってきた重要な堤防であり、現在でも釜無川右岸治水の要となっています（P.15）。

平成14年に行われた発掘調査の結果、堤防は砂礫とシルト（非常に細かい砂）を交互に積み上げた堤防の構造状況を確認することができました。調査された部分は、幕末から明治時代以降構築されたものと推定されており、江戸時代に造った部分は発見できませんでしたが、江戸時代以前から決壊、再構築が頻繁に繰り返されてきた将監堤の歴史とこれにかかわった人々の苦労の跡を知ることができました。



将監堤（南から）



調査風景



将監堤断面：砂礫とシルトを交互に積み上げている構造がわかる



水防への祈り

洪水に苦しめられてきた人々は、古くから神仏へ水防への祈りを捧げてきました。そのしるしは、現在も市内各所に残されています。

御勤使川扇状地の扇頂部に位置し、扇状地全体の治水の要とも言える有野地区には、水宮神社が祀られています。寺記では天長11年(834)に起こった大水害の際、天皇より勤使が遣わされ、水の神である水波能女命(うずのはのみこと)をこの地に祀ったのが始まりと伝えられ

ています。大正15年水宮神社拝殿を改修する際にも、下流の村々から寄付がよせされました。

上高砂地区は御勤使川、前御勤使川、釜無川の3河川と接し、古くから洪水の被害をうけてきました。そのため地区内の上村、中村、下村それぞれに水防の神として水神の九頭龍神が祀られています。また江戸時代には村の安全を祈願し、前御勤使川沿いに水神でもある七面大明神を祀った日蓮宗円覚寺が建てられています。



水宮神社（有野）



円覚寺（上高砂）



九頭龍神祠（上高砂）

九頭龍神掛軸と譲人帳
(上高砂上組)

治水技術とこれから

治水工法は、昭和に入ると氾濫防止が優先され、川の三面をコンクリートで固めた護岸が主流となりました。その結果、川が日本全国皆同じ顔となり、人だけなく、水辺の動植物にとってもちょっと近づきにくい存在となりました。そんな反省から、近年では安全を確保しながら、水辺本来の自然をできるだけ残し、水辺に棲む動植物にもやさしい川づくりが進められています。それは同時に人と川がかかわりあいながら作り上げられてきた、原風景を取り戻す川づくりでもあります。かつて先人達は川をよく観察し、川を知り、それぞれの川の特性に合わせた治水を行ってきました。現在の私達に必要

なのは、そうした謙虚な姿勢を見直し、治水とともに自然、歴史環境にも配慮した新たな川づくりをすることではないでしょうか。川を身近に感じ、川をよく知ることで人と川との新たな在り方が生まれるかもしれません。

そして現在はさまざまな技術により川の安全が保たれています。しかし、「災害は忘れたころにやってくる」とは物理学者寺田寅彦博士の言と伝わる有名な言葉。市内における治水の歴史は、人が常に川の安全に目を向けることを私たちに語りかけてきます。

さあ、これから川は、人の知恵によってどのような歴史を水面に映し出すのでしょうか。



滻沢川、坪川などその他の河川の治水

天井川のあつまる景観



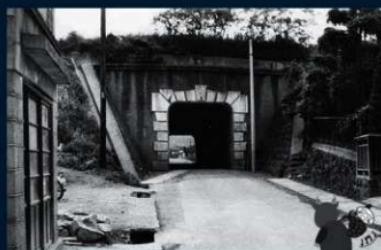
南アルプス市南部の様子。いく箇もの河川が一点に集まって釜無川と合流している。そのため、昔から常河床干涸地帯であった。

天井川 Tenjyougawa

周囲を山々に囲まれた甲府盆地では、降雨はいくつもの河川となって、その急しづな山肌を流れ下って盆地底部に集まります。その流れは自らが山肌を削りとて運搬した砂礫の堆積によって絶えず変化し、その向きを変えてきました。これに対し人とは、わがもの顔で流れる川を固定し、自らの描いた耕地や村を水害から守るために堤防をつくりましたが、砂礫の流量の多い河川では、12ヶ所の「前御使川とお熊野堤」のところで説明したとおり、やがて川は家の屋根よりも高いところを水が流れる「天井川」となっていました。市内に降った雨や湧き出た水が集中する南アルプス市域南部は、西側に崩れやすく急しづな山々がせまることから、同時にいくつもの天井川が集まり、独特的の景観を見せています。

例えば河川の下をくぐる隧道（トンネル）です。高くなつた川を越える不便を解消するために設けられた隧道が、かつて市之瀬川に1カ所、滻沢川には3カ所もありました。隧道ができる前は物資などの運搬の際、高い天井川に登る「急坂」にとても苦労したといわれます。隧道は天井川を抜本的に解消できなかった時代の人々の工夫のひとつともいえます。

また、滻沢川と孤川など、二つの河川がどこまでも平行に流れているのも天井川が作り出した景観です。これは山から流れ下ってきた川と合流していた内水河川が、合流先の河川の河床の上昇（天井川化）によって、それまでの場所で合流



落合隧道 昭和8年（1933）竣工

市之瀬川の下に設けられていた隧道。現在は河川改修によって、市域にあったすべての隧道が解消され、橋が架けられている。

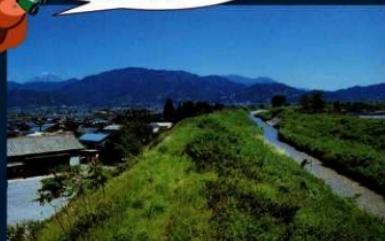
できなくなり、より下流に合流点を探して付け替えられる、いわゆる「つきのべ工事」が繰り返された結果です。

ところで、天井川の本当の不都合は、川を渡る交通の不便などというよりも、むしろ洪水により一度あふれた水が川に戻れず、冠水が長期間にわたり被害を甚大にすることにあります。これに加え、地下水位の上昇や排水がうまくいかないことによって周囲に水窓地という水はけの悪い耕作不能地が増えるなどして、長く周囲の村々を苦しめてきました。

天井川はしかし、人々が自らの生活を守るために、常に川に働きかけてきたことの証ともいえます。人と自然のせめぎ



ほんとに座標より高いところを
川が流れているんだ！



改修前の滝沢川（昭和 50 年代）

山梨県 1990 「改修工事完成記念誌 たきざわ川」より

合いの造りだした景観なのです。自らの耕地や生活を守るために堤防を保守すればするほど天井川は顕著なものとなり、それがさらに人々の生活をおびやかすというジレンマを抱えながら、人びとは暮らしてきました。現在は、抜本的な河川改修により河川の切り下げ工事が行われ、隧道は姿を消し、砂防工事の進展もあって顕著な天井川とその被害は見られなくなっています。しかし、つい数十年前までは天井川の状態や水位に一喜一憂する時代があったのです。

河川の立体交差 Kasen no Rittaikousa

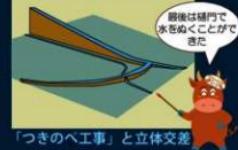
天井川によって合流ができなくなった内水河川は、下流へ下流へと「つきのべ工事」を行って合流点を探りましたが、それにも限界があつて、やがて天井川同士の合流によって行く手を「川の壁」に阻まれてしまいます。そこで、天井川と天井川の間に発生した水を抜くための樋門を造り、川の下に川を通す、河川の立体交差が考えされました。現在、市域南端部では井路緑川（西川）樋門、五明樋門、横川樋門、長沢樋門（富士山町）の4カ所の樋門を見ることができます。その起源は必ずしもはっきりしませんが、市内3カ所の樋門のうち、井路緑川樋門は天和年間（1681～84）以前、かつて戸田、宮沢、大師の3カ村の排水であることから「三ヶ

村水吐埋樋」となど呼ばれた五明樋門は天明7年（1787）以前にその設置が巡ることが史料から明らかになります。横川樋門は戦後の河川改修時の構築です。

しかしその水をどこに抜くかについては、昔からなんとか水を抜きたい上流の村々と、もうこれ以上一滴も水などはしくない下流の村々で争いが繰り返されてきました。上流の村の排水は下流の村にとっては迷惑でしかなく、こうした利害を異にする村々の争いが喧嘩にならなかったことも明らかになっています。例えば現在の井路緑川樋門の場合、天和年間以前、元々市之瀬川を伏越して、滝沢地内の坪川北堤外へ落としていたものが、河川状況の変化によってうまくいかなくなり、新たな排出先を探るたび、排水先である前沢村や長沢村と論争が繰り返されており、坪川を埋理で越えて長沢村地内に落とすという、現在の流れにようやく決まったのは文化8年（1811）になってからのことです。この間に約130年、最終的には昭和37年（1962）の坪川の改修による樋門拡張工事まで小さな争いは続いています。のちの五明樋門である「三ヶ村悪水吐埋樋」でも樋門の構造や規模などが、下流の長沢村と繰り返し確認されており、樋門が関係村の高い関心をもって議論的となっていたことがわかります。

河川の集中する市域南部では、このように現在でもいくつもの河川の立体交差が見られ、長い間の人と水とのかかわりが造った、この地域に特徴的な景観ということができます。

その他の河川 Other Rivers...



現在の滝沢川と狐川

大井の御手洗池湧水に源をもつ狐川は、躍り返された「つきのべ工事」の結果、現在の滝沢川と平行に流れている。



現在の井路緑川樋門

市之瀬川と堰野川の下を潜る。樋門左下の■は、史料（伏越埋樋定式説出帳）にみる天保4年（1834）の時の樋門の大きさ。

逆水（逆流洪水）Gyakusui

ようやく合流問題を立体交差によって切り抜けた村々ですが、水との戦いはこれでは終わりませんでした。樋門で低地の水を抜くようにしたのは良いのですが、今度は合流した釜無川の水位があがると、その増水した水が、より低い場所を目指して樋門を逆流してくるようになります。これを逆水（逆流洪水）といいます。ところで、甲府盆地南部とその周囲の山々に降った雨や湧き出た水は、すべてが盆地の出口である「禹之瀬」に集中し、ここで河川の流量が一定量をこえると、



宮沢の深向院にせまる洪水 伊勢湊台風（昭和34年）時の写真。富士川を逆流した水が深向院（写真中央）にせまる。



川の壁 空から見ればこの地域が、まさに周囲をいくつもの高い「川の壁」に囲まれていることがわかる。



永享豊潤（えいきょうよほうじゅん）の碑文 明治22年竣工の先々代の五明樋門のアーチ上部にあった碑文 記念として造られ、今は平成20年に改修の終わった現在の五明樋門の傍らに移されて、人々と水とのかかわりの歴史を伝える。



長久寺の舟 東南隅の長久寺の舟下には、現在も2艘の廻船残されている。昔段は廻船から物資の輸送やむちの荷役を負う力ヤを探りに行くのに使われたが、水害時には人々の救助などに活躍したという。

地下でない水が満り、川の水位がいっそう上昇します。

「禹之瀬」に近い市域の南端部では、なおさらその影響は大きく、この逆水の被害を大きなものとしました。



樋門と排水機場のしくみ

河川を立体交差させて水を抜く樋門の代償として人々は長い間これを甘受していましたが、明治30年代から40年代に至ってこの冠水地帯にあった田畠、宮沢の集落はついに堪えられなくなり現在の地に移転を余儀なくされました。

最近でも、平成12年に一帯が冠水するなど、その戦いはまだ続きますが、現在は、樋門自体の改修に加え、逆水の際には樋門を締め切り、内水を本川にポンプでくみ上げる排水機場がそれぞれの樋門に造られており、「禹之瀬」をひらげる河川改修もあって、逆流洪水の心配は大幅に減っています。



宮沢中村遺跡 明治30年代から40年代にかけて、村ごと移転した田畠（中村田村）の跡地。発掘調査によって住居跡や寺院、寺院に続く参道など、当時のひとの暮らしの跡がそのままつかった。



現在の五明樋門（左）と五明排水機場（右）



明治 40 年の水害と南湖村水害図

南アルプス市南湖報徳社に保管されている南湖村水害図（下写真）。これは、明治 40 年（1907）山梨県内に壊滅的な被害をもたらした大水害時、南湖村の人々が村の被害状況を詳細に記録したものである。この図が作成されたのは同年の 12 月、絶望的状況から復旧作業が進められた時期に当たる。なぜ村人はこの水害図を作ったのか。下記の詞書（右下は意訳）にはその真意が記されている。



明治 40 年南湖村水害図（南湖報徳社蔵）



この言葉は南湖村の人々に請われ天民義塾と呼ばれる私塾の塾長となり、郷土に多くの人材を育てた水戸出身の締引竹次郎の言葉。この図に込められた願いは、百数十年後に生きるすべての人々へ託されている。

締引竹次郎

明治四十年十二月

天民義塾長 締引竹次郎
私立報徳農業補習學校長 青沼兼吉 書

今から八〇年前、将監堤が決壊して（釜無川が）氾濫しその惨害を極め、南駿沢に至つて止まつた。時が移りゆく中で、人々は周りの人々のことを考えず、自らの安全ばかりを追いかめるようになったが、明治四〇年八月二五日、再び（将監堤が）決壊し、（その被害は）見渡す限りすさまじいたましい状況で、田園の荒廃は昔（の水害）と比べてさらにひどい状況である。この図がその時の状況である。どうか後世の人々よ、この図を鑑みて、よく考え、よい方策を講じてください。それをしなければ、この図を見てただいたずらに哀しまだけで、戒めとはならないでしょう。



近代の治水技術

砂防堰堤

明治時代になると明治政府は治水対策の要として、砂防堰堤を全国各地に整備します。砂防堰堤とは、雨により山々が侵食され流れ下る土砂を堰き止めるダムで、土砂でダムが埋まった後も、川の勾配を緩やかにする役割を果たします。江戸時代にはすでに、福山藩（広島県）によって「砂留」と呼ばれる石積みの堰堤が造られていましたが、全国各地に普及するのは明治以降、オランダ人工程师の指導によるものです。

御勤使川にも早くから砂防堰堤が造られ、大正年間にまとめられた『富士川流域御勤使川筋砂防工事報告』によれば、

その頃までにはすでに堰堤 78 基、護岸 35 カ所が確認されています。しかし、当時の石積み堰堤は強度が弱く、現存する大和川の堰堤 2 カ所を除くと明治・大正期に造られたほとんどの堰堤は現在流失、埋没しています。

大正時代、当時の最先端技術のひとつであったコンクリートが、日本全国に先駆け山梨県で砂防堰堤の材料として使われることになります。日本初となるこの本格的なコンクリート製砂防堰堤が、芦安地区の芦安堰堤です。芦安堰堤のほかにも、源堰堤や藤尾堰堤など初期のコンクリート製堰堤が造られ、御勤使川の治水は大きな発展を遂げることになります。市内で培われた砂防の技術は、全国の砂防堰堤に応用されていきます。



大和川堰堤 Ouwagawaentei

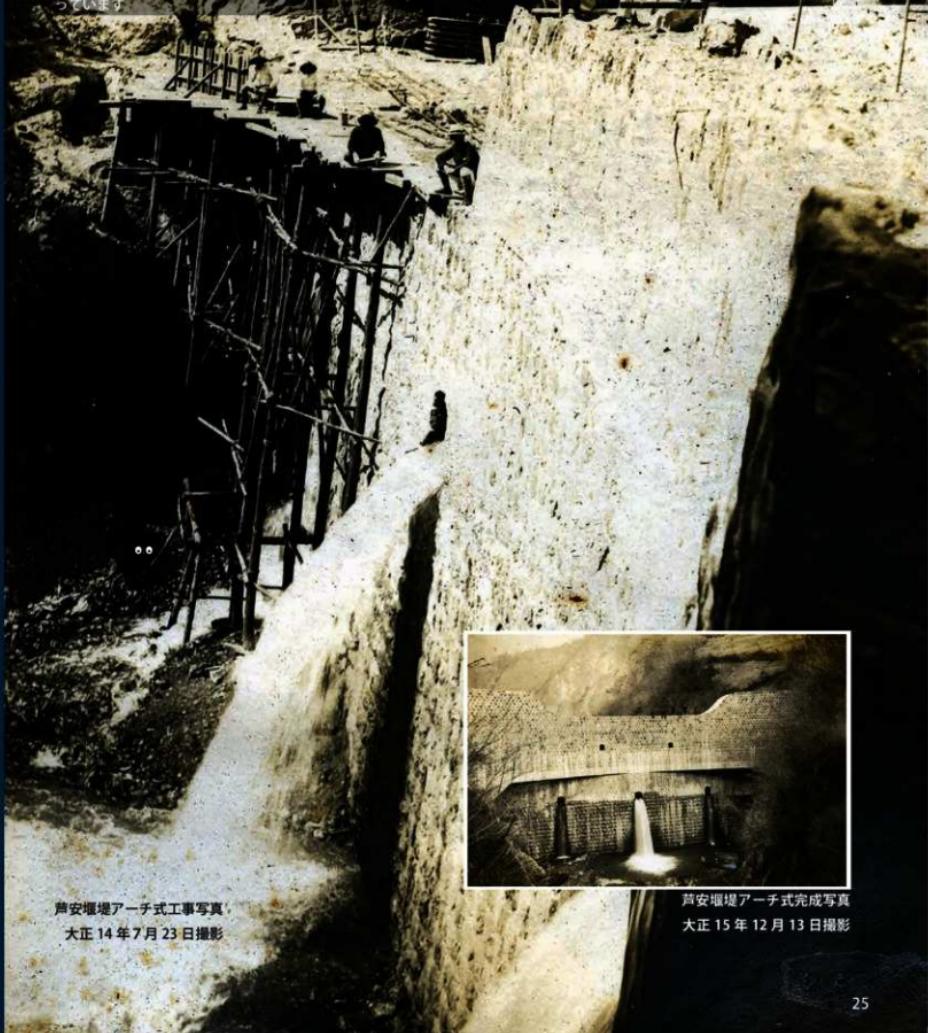
巨摩山地から流れる大和川に築かれた石積みの堰堤です。明治 35 年頃着工されたと推定されています。コンクリートで造られる以前は、石積みの堰堤が主流でしたが、強度が弱く、洪水によって流失する堰堤も少なくありませんでした。

源堰堤 Minamotoentei

大正 9 年に竣工。高さ 7 m、長さ 109.1 m ある大型の堰堤です。芦安、藤尾堰堤とともに現在でも大正期の姿をとどめている数少ない堰堤のひとつです。芦安堰堤と並び、「御勤使川治水の双壁」と呼ばれました。現在でも私たちの生活を支えています。

芦安堰堤 Asiyasuentei

大正5年(1916)～15年内務省直轄砂防事業として御動使川上流の芦安溝に設置された砂防堰堤です。最初は重力式と呼ばれる方法で造られましたが、大正7年完成直後の出水によって土砂で埋まつたため、その上にアーチ式の砂防堰堤が造されました。日本で初めてコンクリートを使用して造られた本格的な堰堤で、国の有形登録文化財となっています。



堤防ダムボンノア

三面コンクリート標準断面

づくり減災多自然川づくり
づくりあふれる歴史・文化との調和
川カオト 自多

Mなま
MINAM ALPS Cultural
Heritage Navigation System



平成24年度史跡等及び埋蔵文化財公開活用補助事業

発行日 2013年 3月27日

監修・発行 南アルプス市教育委員会

〒400-0492

山梨県南アルプス市駿河1212

電話 055-282-7269

印 刷 (株)サンニチ印刷

今決済ヨリ八十年前に至
惨害ヲシテ横流汎溢前村壁
ナ止ミタ物換ツ私星移
ヒリ人皆公ヲ蒙テ私猶
レ誅シルハ明治四十
年八月二十五日又復次
益清浦日傍榆田園ノ荒廢
レ昔年ニ譲サルナ
後ノ其國即是ナ
呼後ノ人此ノ園ニ對シ
之能ク之ヲ鑑ミ之ヲ念ニ
ハ良方ヲ講ヘルアノフ
ハ後ノ人又徒ニ此ヲアサル
ニ對スルノミ戒シメサルヘ
ラムノミ戒シメサルヘ
ケムヤ

